2009年（平成21年）
第14号
（2月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会５０年の歩み（１回目）

■京都布教の源流

本会の地方布教は昭和２２年の茨城をかわきりに東日本を中心として展開されていたが、関西布教は昭和２５年頃から佐野元章夫婦らの捨て身の神戸布教から始まるとされている。そして神戸支部を形成するまでになり、その神戸支部の京都組として、京都にご法が広がっていくのだ。

また、東日本の会員との縁によって、入会した京都の信者さんもあった。その最もご縁の深かったのが第三十九支部だった。この第三十九支部の京都所属の信者と神戸支部の京都組の会員など、初期に入会された多くの先達たちのおかげで今の京都教会の基礎が築かれていった。

■初期の布教リーダー　山村浩子

初期の京都での布教を引っ張ったのが、後、滋賀教会長、舞鶴教会長を歴任された山村浩子（故人）だ。子供の病気に悩んでいた山村は、昭和２７年１２月、東京に住む姉で、第三十九支部所属の故・西村佳子に導かれ入会した。

東京から送られてきた機関誌「佼成」を読んで強く心を打たれた山村は、自分のこれまでのわがままな不平不満の生き方を反省し、総戒名の前で懺悔し、家族の前で手をついて誤った。すると子供の病気が良くなり、家に閉じこもりがちだったその子が、外に出るようになった。この鮮やかな現証をいただいたことを契機として、ありったけの情熱をご法活動に打ち込んだ。

毎月東京の本部に熱心に通い、導きにも励んだ。菓子卸業をしていた彼女の夫・浩造は、同業者の田中基之（故人）を導き、田中は従兄弟の杉本安男を導いた。この二人は後に教団の重責を担うことになる。

■第三十九支部京都連絡所の発足

山村らの布教活動により会員は増え続け、法座も毎日開かれるようになってきた。ご法活動を展開していくために、布教拠点の確立が必要不可欠になってきた。

会員が増えて手狭になってきた山村は、下京区から右京区太秦安井に引っ越した。昭和３２年６月、その山村宅に第三十九支部の「京都連絡所」が発足し、ここに京都における最初の修行道場が誕生した。

一食を捧げる運動

平成２１年次　一食平和基金運営計画を発表

本年次は、国家や地域間で拡大する貧富の格差や貧困層の増大、深刻化する地球温暖化問題を踏まえ、「貧困の削減」「環境」の分野に重点を置く事業に取り組むほか、「難民支援」や「教育・育成」など、プロジェクト内容を九つに大別し計画が発表された。「貧困の削減」の分野では、庭野平和財団に委託助成して、貧困者の自立を支援する「南アジアプログラム」をはじめ、「アフリカへ毛布をおくる運動」など五つの事業に１億５２８０万円を計上。「環境」の分野では、ベトナム、カンボジアで実施される「農業・環境・地域開発事業」など二つの活動に１１０１万円が充てられる。

難民や国内避難民を対象に支援活動を行う「難民支援」分野の取り組みでは、「ゆめポッケ」、特定非営利活動法人ジェンと協働する「人道緊急・復興支援事業」など計５事業に８５３１万円。さらに、「教育・育成」の分野ではフィリピン・バターン州の貧困家庭の学生を対象とした「奨学金支援」のほか、「国内ＮＧＯ育成支援」の活動などに４９８４万５０００円が計上されている。

また、「推進」の分野では、「一食を捧げる運動」の基となる「一乗」精神の浸透と普及を目的に広報活動を展開。インターネット上に開設されている同運動のホームページの改訂などを予定している。なお、今年から新たに「緊急」の分野として、国内外で発生した災害などに際し、随時、資金助成を行う。

時事刻々

二月五日、ＮＡＳＡ（米航空宇宙局）で、欧米を中心に約６００人の教育関係者が出席して「宇宙を教育に利用するためのワークショップ」が開催された。九五年から毎年開催されているものだが、今年は日本から三人の代表者が発表した。

その一人に、枚方市の小学校教諭、竹内絵理さんが、自身の考案した指導方法として「二酸化炭素が地球温暖化にもたらす影響についての実験」を紹介した。

竹内さんは、学生のときに人工衛星「まいど１号」の実験に参加。このとき『この取り組みを子供たちへの教育に生かしたい』と思うようになったという。

一月二十三日、東大阪発の人工衛星「まいど１号」は打ち上げに成功した。世界で初めて衛星からの雷観測を実施する。

多くの人の夢を乗せた「まいど１号」に続いて、未来に飛び立つ人々の活躍に期待したい。

諸宗教対話　～開祖の願いをこの京都の地に～

宗教協力

開祖生誕百年記念行事として、私たちは当時開祖に倣いてを目標に近畿宗教青年フォーラムを開催しました。京都教会においても、京都の宗教青年の参加を呼びかけるべく、松緑神道大和山教団の千賀先生、解脱会の森山先生、パーフェクトリバティー教団の森井先生に会う機会をいただききました。

近畿宗教青年フォーラムは「近畿発の世界平和を私たち宗教青年がとの願いで」と緊張しながら趣旨説明しましたが、各先生方から心強い賛同を得てとても感動をいただきました。また千賀先生から「是非当会の青年に会って下さい」とのお言葉をいただき、早速、千賀先生宅に松緑神道大和山教団京都支部の青年の集まりに訪問させていただきました。

神前での挨拶の後、千賀先生より教団の説明をしていただき、その後は青年部員さんと色々な話をしました。教団での青年部活動、新宗連の活動、そして普段の生活や趣味の話に至るまで時間を忘れて話ができました。そして千賀先生の奥様の手料理をご馳走になり楽しいひと時を過ごさせていただきました。筆者は千賀先生と松緑神道大和山教団さんが大好きになりました。また宗教は違えど共に地域社会の平和貢献を共に活動したいと願っていました。

あれから５年が経ちました。京都で宗教青年が集まり何かできるというより、先ず出会って語り合い、大好きになりたい。第一歩はそこから始めることが大切だと思っています。

私のほのぼの日記（京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです）

生かされている思いを忘れずに

京都市議会　中野　洋一

今年４月で、初めていただいた議員活動の折り返しを迎えます。あっという間の２年間。後半は、自らの政策立案力を身につけ、皆さんに役立つ議員として活躍していこうと、元旦に神仏に祈願いたしました。

私たちは、日々の予定を決めて、何気ない思いで手帳に書き込んでいます。しかし、ふと立ち止まって考えると､この作業はなんとも幸せなことではないかと、私は思うのです。

かつて地域の敬老会でのことです。あるお年寄りの方から「あなたは若いけど、私はもう年だから、来年も出られるかわからない」と冗談半分で私に話してくれました。私には衝撃でした。

明日、来月、来年の予定を、手帳に書き込むことができます。神仏に生かされているからできるのです。このありがたさを、肌身離さず持ち歩いていきます。

生かされている思いを忘れずに

城陽市議会　寺地　　永

食の安全が脅かされる今日ですが、先進国の中で日本だけが規制していない食品があるのをご存知でしょうか。それは「トランス脂肪酸」といい、学校給食で食べ続けてきたマーガリンが代表格で、子供たちが好きなお菓子や菓子パンなどに多く使われています。

食用油などを加熱し、水素を添加するとトランス脂肪に変化します。自然界にない化学組成に変化し､「食べるプラスティック」と呼ばれるものになります。米国では州単位で全面禁止が拡大しています。

脂肪というのはエネルギーになるだけでなく、細胞膜の成分になっています。自然界にない脂肪が入り込めば細胞の構造や働きが狂ってくるのは当然です。特に脳への影響は深刻です。私はプロスポーツ界にいたときに学んだ予防医学や正しい食生活を伝えていくことが自分の役割として、今後も訴え続けていきます。

他教団活動紹介　（中外日報１月２９日より）

●ガザ紛糾で緊急平和会議

世界宗教者平和会議(WCRP)国際委員会は１９日から２１日まで、パレスチナ・ガザ地区での紛糾を受け、フランス･パリ市内のホテルで「イスラエル･パレスチナ緊急青年宗教者平和会議」を開催した。席上､「暴力」「占領」という言葉のとらえ方の違いで一時、議論が紛糾する場面も見られたが全員が和平への希望を持ち今後も対話をするとの認識をした。

京都教会　あの日あの時

昭和３３年３月

山村主任（前列中央）を中心に身延山・七面山参拝。白装束でお襷をし首から大きなお数珠をかけ、太鼓をたたいてお題目を唱えながら頂上を目指します。当時の修行はカミソリの刃の上を歩くような真剣さだった。

５０年前（１９５９年）の出来事：２月１日にフジテレビ、日本教育テレビ（ＮＥＴ）が本放送を開始しました。

「明るい社会づくり運動」トピックス

明るい社会づくり運動・京都連絡協議会（京都明社）は、地区明社と運動に賛同する個人・法人・団体で構成され、京都市民とともに運動の推進を図っています。１月１４日、京都明社の定例会が開催され、以下のように、各地区明社から活動報告がありました。

（１２月度の各地区明社の活動）

１２月にＮＨＫ歳末助け合い募金を実施＝京洛明社、中央明社、右京明社、山科明社、乙訓明社。

１２月７日、伏見明社による七瀬川清掃。

１２月２日、宇治明社が宇治市福祉祭に模擬店を出店。

また同日、今年実施する「東京佼成ウインドオーケストラ」公演の実行委員会を立ち上げました。同公演は京都府吹奏楽連盟と京都明社が共催で開催します。７月９日（木）１８時、京都コンサートホールにて開催されます。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《今の中に見つける　‥‥　功徳》

法華経は功徳(くどく)の塊です。どこを読んでも功徳ばかりです。だから、しっかり読んで、素直に行ずれば、功徳が頂けないはずはないのです。

庭野光祥次代会長は、著書の中で次のように述べています。

「大丈夫。みんな仏さまのおはからいなんだよ」開祖さまのこの言葉に、私は今までどれほど支えられてきたことでしょう。私の息子は、生まれたばかりの頃から、顔に湿疹がありました。普段はとても機嫌のいい赤ちゃんなのに、眠くなって泣くと体温が上がり、かゆみがひどくなって、夜も眠れないのです。顔をかきむしってしまわないように、この子がすこしでも眠れるようにと、私は毎晩息子を抱いて、ソファに座ったまま朝まで過ごしました。

それが何ヶ月も続き、いろいろ手は尽くしているのに、湿疹は良くなるどころか顔中に広がり、四ヶ月を過ぎた頃、きれいな皮膚が残っているのは鼻の頭だけでした。一人になって腕の中にいる息子の顔を見ていると、こんな状態がいつまで続くのかと、かわいそうで、悲しくて、涙がこぼれました。

ところがある時、ふと思いました。**《もし、この湿疹がなかったら、今頃どうだっただろう。四番目の子で手がかからないだろうから、私はきっと平気で家に預けてお役(教団で役割を頂いて修行すること)に出かけてしまい、あまり抱っこもされないままで成長してしまったかもしれない》**そう思うと、いま、こうして抱っこしている時間が、仏さまが私たち親子のために下さった宝物のように思えてきました。

気がついてみると、上の三人の娘たちは、湿疹で真っ赤な顔をした弟なのに、いつもまわりに寄ってきて、「かわいいね」とあやしたり、抱っこしてくれます。主人や両親も「きっと良くなるよ」「昨日よりいいんじゃない？」と、ずっと私を支え、励ましてくれていました。

私は心の底があたたかくなり、しみじみと幸せを感じました。**もしあの時、何が悪かったのだろうと考え、治すことにとらわれていたら、家族一人ひとりのあたたかい気持ちにも気づかず、いまある幸せを味わうことができなかったかもしれません。開祖様は「幸せというのはどこかにあるものを追い求めて得られるのではなく、いま自分がいるその場所で見つけ出すもの、気づくものです」**と、おっしゃっていました。

問題を否定したり、直そうとするのではなく、そのままを喜ぶこと、それが**「本質的な救われ」**です。そのままの中に、いつも喜びを見つけ出すことができれば、むしろ、問題に出合うことで幸せを実感できます。つまり、ものごとの見方ひとつで、その見方に見合った豊かな人生が展開するのです。

開祖様のおっしゃっていたことが、よみがえってきました。**「どんなことも、すべて仏さまのおはからい」**。それが信じられたら、心からそう思えたら、私たちはどれほどたくさんの幸せを見つけられることでしょう。どんな現象も、そこに仏さまのはたらきを見つけ出すことができれば、悩みすらが皆、功徳になるのです。ある時とふと気づくと、息子の湿疹は、ほとんど気にならないほどに消えていました。

何も変わったことのないのが功徳である場合が多いのです。その功徳を感じとるのが、真の信仰者というものです。病気が治ること、また病気にならないことも功徳です。けれど、今あるそのままのなかにこそ、本当の宝物があるのです。

心が変わったのに、人生が変わらないということが、ありうるはずはありません。必ず変わります。この**《信仰によって心境が変わり、心境が変わることによって人生が変わる》**ことを、功徳というのです。ですから、信仰には必ず功徳があるわけです。」

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《熱い議論と笑顔の拍手》

非武装研究部会では、激しい議論が飛び交った。「宗教者として私は非暴力を原則とはしているが、暴力に苦しめられる人々を黙認していたのでは宗教者としての隣人愛はどうなってしまうのだろうか」「私たちの国では非暴力はそのまま死を意味する。人間が人間らしく生きるために戦うことは悪なのか」そうした訴えに対して、ベトナムの仏教代表は答えた。

「ベトナムでは、すでに二十五年にもわたって暴力が行使されているが、それは何の解決も与えていない。ベトナムの仏教徒は、断食し、祈り、暴力に抗議する戦いを続けている。宗教団体が力をあわせること、民衆の教育を進めることを中心に、非暴力の運動を進めている。非暴力は実を結ばないという人もいる。だが、それは非暴力が無力だからではなくて、ベトナムの戦争がベトナムだけの問題でなくなっているからだ。世界の人びとが、われわれの非暴力の運動に力を貸してほしい」

東西に分かれて対立している自由主義諸国と社会主義諸国の宗教者が一つのテーブルについて、具体的に問題の解決を語り合う会議は、いまだかって実現したことはなかった。宗教上の習慣が違えば、考え方も感じ方も違って当然だ。しかも、それぞれ国情も異なる。「そうして宗教者が集まって非武装、開発、人権などという具体的な問題を論じ合うなど、無謀もはなはだしい。対話など到底不可能だ」と危ぶむ人も少なくなかった。

研究部会で、国の違い、宗教の違いによって激しい意見の対立があったことも報告された。しかし、会議の合間のコーヒーブレイクのひとときや、テーブルを一つにしての食事の席では、打ち解けた意見交換がつづき、笑顔で握手を交わす姿がそこでもここでも見られた。「この会議は、成功間違いなしだ！」委員のメンバーの意見は一致した。

共産圏の宗教者も、相手と手を取り合って話しさせてもらうと、「宗教者として私個人は賛成だが、国情を理解してほしい」と本心を明かしてくれるのである。国際会議では表舞台もさることながら裏舞台での話し合いがどれほど大事かを学ばせてもらった。

《歴史に残る京都宣言》

研究部会での討議がつづくなかで、非武装部会のなかに緊急にベトナム特別委員会が設けられた。戦火にさらされる南ベトナムで反戦運動をつづけているベトナムの宗教者の訴えが、世界の宗教者を動かしたのだった。それぞれの国の政治的立場がからんで収拾がつかなくなる恐れがあったが、それを乗り越えて、何としても宗教者としての一致点を見いださなくてはならない、と真剣な努力が続けられた。そして「米軍の即時無条件撤退」「ソ連・中国の武器供与停止」「停戦監視団設置の呼びかけ」の決議が行われ、最終日には**「世界宗教者平和会議宣言」**が採択された。

「平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である。宗教に対するこの背反は改めることができるし、また改めなければならない。われわれは生きるのも死ぬのも一緒である。われわれは共通の破滅へと漂いゆくこともできれば、平和のための闘いに共同してあたることもできる。われわれは全人類を人間家族とする根本的一致をみた。宗教はいまや歴史的背景の相違を乗り越えて、真の平和を達成しようとする努力にむかって、万人を結束させるべきだと信ずる」この「京都宣言」は、全世界の宗教者が世界の平和に対して共同して責任を負わなければならないことを誓い合う、まさに歴史的な宣言であつたといえよう。

人間関係の出発点は、何よりもまず出合うことだ。出会いがあってこそ語り合いができる。語り合って初めて、たがいの理解が生まれる。ほんとうに、たがいを理解しあうことによって信頼が生まれ、愛情がわいてくる。たがいに心から信頼しあい、愛情で結ばれるようになってこそ協力体制ができあがるのである。それは、いかにも遠回りの道のように見えるが、これこそが平和づくりの正道なのではないだろうか。

いま目に見える効果がないように見えても、一歩でも半歩でも、まず踏み出すことだ。**どんなに不毛な地だからといって、種を蒔かなければ芽が出る事はない。地におろされた種は、いつか芽を吹き、花を咲かせ、実を結ぶ時がくる。平和境建設にむかって一歩を踏み出せば、一歩分だけ平和は近づいたことになる。百歩進めば百歩分だけ平和境は実現されているのだ。その信念を失ってはならないだろう。**　（つづく）

渉外部からのメッセージ

２月３日は節分。京都教会では１日の日曜日に多くの会員さんと共に式典を開催しました。寸劇では「鬼は外、福は内」ではなく「福は内、鬼も内」という掛け声で豆がまかれました。どんな人にも仏になれる性質があるという仏教思想の現れです。

また毎年元日に配っていた「あなたの今年の運勢」もこの日に配られました。本当の意味でこの日で節が分かれて新しい年を迎えた訳ですね。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266